

第35回 グローバル感染症研究セミナー

2025年1月10日(金)
16:30-17:30

参加登録はこちら

<https://forms.gle/oFs3A4JN2RtMXJtZ9>



演者：古賀 諭 先生

大阪大学大学院医学系研究科感染症・免疫学講座
生体防御学教室 助教

ハイブリッド開催

(Zoom、グローバル感染症研究センター棟 1F多目的室)

エブネル腺導管IL-33+細胞と舌免疫系ネットワークが 織りなす組織バリア調節

口腔の大部分を占める舌は、咀嚼や嚥下、食物の消化、味覚応答など生命の基本活動である「食べる」ことの中心的役割を担う。特に、味覚は乳頭に存在する味蕾により感知され、必要な栄養素を食物から摂取する上で安全性を評価する口腔バリアセンサーとして機能する。一方で、舌は消化管や呼吸器の入り口に位置し、病原体や食物抗原、機械的ダメージなど様々な外来刺激に常に曝されている。そのため、宿主防御と恒常性維持に働く舌免疫系の重要性が示唆されるが、舌内で免疫細胞がいかに制御されバリア形成に寄与するかはこれまで分かっていない。我々は、マウス舌有郭乳頭の直下に存在する小唾液腺であるエブネル腺の導管にIL-33を高発現する細胞を同定した。IL-33は細胞障害などにより放出されるサイトカインであり、導管周囲にIL-33+細胞を中心とした免疫系ネットワークの存在が予想された。さらに免疫細胞の分布を調べ、2型自然リンパ球(ILC2)が舌リンパ球分画の主要な細胞であることを明らかにした。ILC2はIL-33に応答し、寄生虫排除やアレルギー性疾患の発症・悪化に重要な役割を果たすが、舌ILC2の知見は乏しく生理的役割は不明である。

本セミナーでは、エブネル腺導管IL-33+細胞の免疫学的機能の可能性について紹介し、最近の研究で明らかになったIL-33+細胞とILC2を介した舌上皮リモデリング形成機構に関して議論したい。

世話人 小林 隆志

(医学部感染予防医学講座 教授、グローバル感染症研究センター兼任)

セミナー問合せ先

大分大学グローバル感染症研究センター共同利用・共同研究係 (5444)

TEL 097 (586) 5444 E-mail glocal@oita-u.ac.jp